

【論文】

アートを基盤とした複合セラピーの研究 思春期の自閉症者との表現を通じた つながりのために

曾根 博美(東京家政大学家政学部造形表現学科准教授)

抄録

自閉症スペクトラム障害(ASD)を持つ子どものケアにおいて、アートセラピーは内面の豊かな世界を表出する手段であるに留まらず、自他の分化を促進する、ソーシャルスキルを獲得する等の点でも重要な役割を果たしていることが先行研究において報告されている。本研究は、米国の多文化環境に暮らすASDと診断された16歳の男子を対象に行ったセラピーの実践から、アートとナラティブをベースとした、セラピーの新しいモダリティを探る試みである。調査は11ヶ月間、32回にわたるアートセラピー・ベースのセッションを実施し、各セッションの記録をもとにセッション内で表現されたドローイングとナラティブに関する考察とPHQ-9スコア等に関する分析から行なった。

結果、得られた知見は以下の通りである。

(1)男子はドメスティック・バイオレンス、虐待経験からトラウマに由来する症状を示しており、アートセラピーが最も適切であると予想されたが、ポジティブな変化を最も引き出したのはドローイングとナラティブの併用であった。また、ASDであることの受け入れに関してはナラティブの構築と表出が重大な心的動力となったことが示唆された。(2)思春期のクライアントとのセッションではゲームなどサブカルチャーに由来する言語にセラピストもコミットメントを示し、協働することが重要であった。(3)男子と心理療法士の文化背景は異なるが、両者がお互いの文化を学び、セッションで協働することがつながりを深め、男子のソーシャルスキル獲得にも貢献した。

これらの知見を、思春期の自閉症者のケアの実践にフィードバックし、さらに多文化コミュニティにおけるアートベースのセラピー研究の一助へとすすめていきたい。

Key word

アートセラピー、ナラティブセラピー、自閉症スペクトラム、サブカルチャー

1.はじめに

本研究は、米国ロサンゼルス市の多文化環境に暮らす自閉症スペクトラム障害(ASD)と診断された16歳の男子を対象に行ったセラピーの実践から、アートセラピーとナラティブセラピーを基盤とした、セラピーの新しいモデルの可能性を探る試みである。

アートセラピー

セラピーのクライアントであった16歳男子は、ASDのほか、ドメスティック・バイオレンス(DV)、肉親からの身体暴力による虐待体験があり、それらの経験により受けたトラウマを原因とする心理的症状が見られた。この男子への適切なケアとして、アートセラピーが第一に検討されたのは、以下のような理由による。

心理療法には多様なアプローチがあるが、移民・難民といった境遇により母国語の医師・療法士がいない場合、子ども、あるいは高齢者の認知症を含む精神障害といった要因のため、言語を主な手段とするアプローチが機能しない場合などには、アートセラピーがポジティブな変化をもたらすことが多くの先行研究により示唆されている[Kramer&Wilson,1971; Caliesh,2003; Hannemann,2006;Rusted et al,2006;Linech et al,2014]。

次に、自閉症スペクトラム障害(ASD)を持つ子どものケアにおいて、描画、工作、彫塑、身体表現等のアートを用いることそれ自体が内面の豊かな世界を表出する手段となり得ることは日本においても自閉症者の美術作品の展覧会などで周知されてきているところであるが、近年ではそれに留まらず、自他の分化を促進する、ソーシャルスキルを獲得するといった点でも、アートセラピーが有意な効果を挙げていることがASDを持つ子どもを対象とした研究により報告されている[Emery,2004;Epp,2008]。

さらに、心的外傷後ストレス障害(PTSD)などトラウマに由来する心理的・身体的症状を緩和するための療法としては、暴露療法、トラウマ集中型の認知行動療法(TF-CBT)から眼球運動による脱感作と再処理法(EMDR)まで様々な療法が試みられている。そのなかでアートセラピーは言語による記憶の再訪を回避できるため、再トラウマ化に対して比較的安全であるという利点がある。このためアートセラピーは特にグループ環境でのトラウマ治療にしばしば用いられ、様々なグループを対象としてその効果が調査されてきた。なお、PTSDを発症する要因としては、戦争、災害、交通事故、性犯罪被害などが知られているが、幾つかの研究はドメスティック・バイオレンスの経験、子どもの被虐待経験とトラウマの相関関係を示唆している[Levendosky,2002; Kagen,2014]。近年の先行調査のうち条件を満たした17例について検証を行った研究では、アートセラピーによって性虐待被害者のPTSDの症状や不安症状が大きく減少したという研究が2例見られる[Slayton et al,2010]。

ナラティブセラピーと個人言語

ナラティブセラピーは自分の物語を「語る」こと、あるいは「語り直すこと(再著述)」がケアであると考えられる。ナラティブセラピーの本質は物語を外在化させる過程を通じて自分の人生や役割を再定義できるところにあり、過去と未来の物語を変容させることを可能にする[Denborough,2014]。トラウマをめぐるのは、過去のネガティブな出来事の記憶を封じ込めずに現時点でのその出来事を再認知する過程に介入することで辛さの緩和を図るアプローチがとられるが、ナラティブセ

ラビーは物語を通じて容易に過去のネガティブな体験に対するとらえかたを変えることができる。しかも、アートセラピーと同様、記憶の再訪は最小化することができる。ナラティブセラピーの創始者・ホワイトは、トラウマを追体験することは再トラウマ化につながりかねず、トラウマの記憶の再訪を促すようなセラピーについて警告を述べている[White,1995]。

クライアントの言葉を学ぶ者としてのセラピスト

その他のセラピーに対して、ナラティブセラピーの特異点はセラピストの位置づけにある。多くのセラピーにおいてセラピストは治療者として言葉を通じてクライアントを「導く」者であるという前提であるのとは異なり、ナラティブセラピーにおけるセラピストとは、まっさらな状態からクライアントについて学ぶ者であり[Anderson & Goolishian,1992; 早川,2009]、クライアントについて学ぶことはそのクライアントの「個人語」を学ぶことである[Anderson,1997; 早川,2009]。ナラティブセラピーのこの視点はベイトソン以降の家族療法の文脈上に生まれ、ポストモダンの思想に現れた社会構成主義の理論に基づいている[McNamee & Gergen,1992]。社会構成主義論者は、個人が語る「物語」はその個人が自分を取り巻く世界、あるいは他者との相互理解と関係によって構築された社会的現実であるにとらえる。認知行動療法をはじめとする「治療者と患者」の立場をとるセラピーは個人の物語と外界の客観的現実との齟齬に着目し、(セラピスト側が考える)より健全な言葉への置きかえを図ってきた。これに対し、ナラティブセラピーでは「語り」を通じてセラピストがクライアントの現実を理解すること、クライアントにとって有益な未来に向けての再著述を協働して行うことを重視する。クライアントの物語を理解するためには、例えば同じ母国語を共有していたとしても、個人によってそれぞれに異なって使われている言語、個人語を注意深く学習することをセラピストは求められる。どんな一つの言葉も、その語を使う場面、意味の広がりや隠喩、家族・地域文化での伝統など社会的に構築された複雑な意味ネットワークとは無縁ではあり得ない。ナラティブセラピーでクライアントが物語を語り直す過程は、セラピストとともに言語の意味のネットワークを発見し、とらえ直し、未来に向けて再構築する過程でもあると言える。セラピストがクライアントの個人語を学び、個人語が両者間で通じるようになったとき、セラピーは「協働な探究」へと変化しうることができるのである[Anderson,1994]。

流動性の高い表現セラピーへ

前述したような再トラウマ化のリスクの低さと、セラピストとの協働性はナラティブセラピーの大きな利点である。一方、言語が十全に機能しないクライアントとのセラピーでは効果を発揮できない可能性が大きい。本研究では、前項で挙げたアートセラピーの様々なクライアントへの適用性、ナラティブセラピーの協働性、双方に共通するトラウマを持つクライアントへの安全性を重視し、この2つのセラピーを接続することで、それぞれの利点を生かした複合的なセラピーの様式となりえると仮定した。ナラティブセラピーにおいて語られる「物語」は「創作」であるフィクションや文学とは異なるものの、この「語り」を創造性を含む「表現」としてとらえたとき、アートとナラティブを行き来できるような流動性の高い表現セラピーの可能性が生じると考える。

2. 研究について

2-1. 研究の目的

セラピーセッションの実践事例を通して複合的なセラピーの効果を検証することが本研究の目的である。

2-2. 本論文の研究上の位置づけ

「1. はじめに」で述べたように、ASDを持つクライアントを対象とするアートセラピー、多文化環境におけるクライアントへのアプローチを可能にするアートセラピー及びナラティブセラピーにはすでに研究がなされている。しかし、アートセラピー及びナラティブセラピーの複合様式によるセラピーの効果に関しては、事例報告を含め先行研究が非常に乏しく、本研究はこの点を調査するものである。

2-3. 研究方法

本論文は実際の事例に基づく事例研究である。主としてセラピーセッションの経過記述から得られたデータに質的分析と解釈を加え、一つの個別の事例としての研究を行う。

2-4. データ収集方法

セラピーセッションの実施

一人のクライアントを対象に、アートセラピー及びナラティブセラピーを基盤とするセッション（原則として週1回、60分または90分）を32回にわたって実施した。各セッションは語り、描画、遊び、工作を含む。セッションはロサンゼルス市内にあるクライアントの自宅で行われた。

セッション以外のデータ収集方法

クライアントのセッション外での変化を母親へのインタビュー、通学している公立高校で定期的開催される個別教育プログラム(Individual Education Program: 以下 IEP)¹⁾ミーティングに参加した際の聞き取りなどから調査する

質問票によるデータ収集

下の2つの質問票を使用する。

PHQ-9

PHQ-9(Patient Health Questionnaire-9)は、大うつ病性障害のスクリーニングツールとして広く用いられている質問票(質問票1)である。過去1週間に感じる症状に関する9項目の質問からなり、症状が「全くない=0点」「数日=1点」「半分以上=2点」「ほとんど毎日=3点」として合計ポイントを算出する。合計ポイントは0～4点はうつ症状がない、5～9点は軽度、10～14点は中等度、15～19点は中等度～重度、20～27点は重度の症状レベルと判定される。

感情記録

毎セッション開始時にDo2learn Resourcesがオンライン上で配布しているエモーショナル・チェックインシート(質問票2)への記入を促す。「穏やか」「ハッピー」「ワクワクしている」「困っ

ている」「ピリピリしている」「怖い」「がっかり」「傷ついた」「悲しい」「退屈」「動揺している」「怒っている」の12種類の感情からあてはまるものをマークする(複数回答可能)。本来、セッション前後での感情の変化を測定する目的の質問票であるが、本調査ではクライアントの感情を言語化、可視化する目的で使用する。

2-5. セッション経過の記述の方法

各セッション後にセラピーの目標(Goal)、セッション内外での介入(Intervention)、クライアントの反応(Response)、セラピーの計画とセッションの位置づけ(Plan)からなるセッション記録ノート²⁾を記入した。セッション記録ノートは観察と問診によるアセスメントを基礎とした客観性に基づく記述が前提となっている。本調査では、上記の記録に加えてクライアントの表現とその内容の記録を行った(描画の撮影を含む)他、ナラティブセラピーの見地から、セッション内外で起きたこと、クライアントの言葉と会話、及びセラピストの解釈と発見を可能な限りそのまま記述した。

2-6. データの分析解釈の方法

セッション経過の記述の分析: 本論文は、まずセッションを5つの時期に分けた上で、それぞれの時期のセッション経過の記述を挙げる。各時期のセッションに対する質的分析は、個別のクライアントに対するアートセラピーの適用性、ナラティブセラピーの協働性、両セラピーの安全性と効果の検証を目的とし、次の諸点を基準に行う。

- ・セッションにおけるセラピストの課題
- ・セッション内外で起きていた事実
- ・クライアントの表現と内容に対するセラピストの発見
- ・セラピストの解釈とその根拠

クライアントの表現と内容に対するセラピストの発見と解釈は、ナラティブセラピーの「クライアントの個人語を学ぶ者としてのセラピスト」としての立場から行われる。

クライアントの母親へのインタビュー: 母親へのインタビューはセッション前に随時行った。母親とクライアントの関係性の変化、クライアントに起きていた事実、そしてその事実がどのようにクライアントの描画や語りに反映しているかを知るための手がかりとなる内容を抽出し、セッション経過の記述に加味した。

IEPでの聞き取り: 前年度のミーティングの記録を参照し、各教員の評価を比較検討によってクライアントのソーシャルスキルにおける変化の分析材料とした。

PHQ-9: 点数をセッション開始時と第15回目、第32回目に測定、比較を行い、クライアントの気分変化の分析材料とした。

感情記録: 頻出する感情の比較を行い、クライアントの感情変化の分析材料とした。

2-7. 倫理的配慮

調査とセッション内容の記録、及びクライアントの描画図版の使用に関しては、セッション開始時は保護者の同意が必要であったため母親に説明した上で書面での同意を得た。本稿執筆時には18歳に達しているためクライアント本人に説明しあらためて書面での同意を得た。クライアントの個人情報保護のため、関連する固有名詞はすべて匿名で記す。

3. セラピーの概要

3-1. クライアントの生育背景

クライアント(以下、Clt)は中国広東省で生まれ育ち、小学校低学年のときに両親とともに米国に移住してきた。中国の一人っ子政策時期にあたり、兄弟姉妹はいない。セラピー開始時点での年齢は16歳、公立高校の10年生³⁾に在籍する。中国にいるうちから、また米国移住後も、母親が父親から激しい身体的・精神的虐待を受けたため、11歳頃に当時暮らしていたアパートから逃げ、14歳までの2年半ほどを母親とともにDVシェルターで暮らした。DVシェルターの運営母体に属していたソーシャルワーカーの支援を受け、ロサンゼルス市内の低所得者向け集合住宅に入居し、現在まで母親と二人で暮らしている。母親は高校を卒業後、結婚し、夫の家族の商売を手伝っていた経験があるが、米国移住後は仕事に就いていない。

3-2. セラピストがクライアントとのセッションを開始するに到った経緯

セラピスト(以下、Th)は50代日本人女性である。東京で生まれ育ち、美術で学士号を取得、美術分野で働いた後、30代で米国ロサンゼルス市に移住した。日常言語はじめ主な文化背景は日本だが、20年に及ぶ米国生活によって米国文化への適応度が高い。米国で臨床心理カウンセリングを学び、カリフォルニア州認定のセラピスト(Marriage and Family Therapist)の資格を得た後、ロサンゼルス郡の精神保健部(Department of Mental Health、以下DMH)プログラム、DVシェルター、被虐待児のケア等でアートセラピーを行う機会が多くあった。Cltは当時、描画に強い関心があることを訴えていたため、アートをセラピーに導入できるセラピストとしてThが紹介された。

3-3. 使用言語

Cltは学年基準にやや満たない程度の英語力を備えているが、母親は英語をほとんど話さないため、Cltと母親の会話には広東語が用いられている。一方、Thの言語は英語と日本語、日常会話程度の北京語と北京語による筆談に限られており、CltとThの会話は主に英語、ThとCltの母親との会話は北京語で行われた。

3-4. セッション開始時の状況

学校生活においては、特別支援担当を含む複数の教師から、学習面でも社会面でも問題行動（同級生との口論、遅刻、無断欠席、無断早退、授業を聞かず絵を描いているなど）が多いことが指摘されている。そのたびに高校から来る英語の連絡と呼び出しが、PTSDとうつ病の治療過程にある母親にとっては多大なストレスとなっている。加えて家庭でも食事を拒否する、壁を叩くなどの衝動的な行動がある。母親によれば、在宅時はほぼコンピュータゲームか、絵を描いているか、音楽を聴いているかで、部屋にひきこもることがあり、コミュニケーションが少ない。母親はASDについての理解が乏しいこともあり、Cltの問題行動をめぐって母子間で激しい言い争いになることがある。

3-5. 臨床歴

- ・小学校中学年でASDの疑いがあり、DVシェルター入居時に高機能自閉症と診断される。中学校・高校ではIEPで学ぶ。
- ・DVシェルター居住時は1週間に1度、プレイセラピー基盤のグループセッションを受ける。現在の住居に移ってからは、ロサンゼルス郡DMHが提供するセラピスト・行動療法士とのセッション(2週間に1度程度)と地域センター⁴⁾から派遣される精神医による面談(3ヶ月に1度程度)を受けており、セラピー開始時は続行中であった。
- ・DVシェルター居住時のセラピストの報告によれば、中国在住時には祖父と父親、米国では父親から身体的・言語的暴力を受けていた。
- ・母親の報告によれば、小学校を通じていじめに遭った経験がある。また、現在住んでいる集合住宅で他のティーンエイジャーの住民から暴行を受けたことがある。

3-6. セラピーの目標

- ・抑うつ状態の改善
- ・学校生活においては、IEPミーティングでの評価の向上を目指し、追加の学習要件を受けずに、4年間の在籍で高校卒業資格を得る。
- ・コミュニケーションスキルの向上。学校で他学生とのポジティブなコミュニケーションの頻度を増やす。母親とのポジティブなコミュニケーションの頻度を増やす。

4. セッションの経過と分析

4-1. セッションの経過と時期の分類

調査終了後、セッション記録を概観して分析した結果、Cltの行動と各時期に優勢であった表現様式に現れた変化に基づき、以下の5期に分類することが妥当と考えられる。

- 描画期 CltとThが共に描画を行う。
- キャラクター設定期 物語の登場人物の描画が中心となる。語りは登場人物の説明に限定される。
- 「語り」期 描画は簡略化され、語りがセッションの大部分を占める。
- 描画と「語り」期 描画を入り口とする語り、あるいは語りの説明としての描画が共に、或いは代わる代わる出現する。
- 現実受容期 Cltの語りは自分の経験を反映したものになる。描画量が最も少なくなる。以下、各時期ごとにセッション経過の記述に分析を加えていく。

4-2. 初対面時

Cltは腰まで髪を伸ばし、フード付きの服を着てフードを被り、口元を手で隠して極力顔を見せないように振る舞った。「どんな絵を描くの?」という質問には直接答えずに、数枚の絵を取り出してThに見せた。いずれもルーズリーフノートに使われる罫線紙に鉛筆で描いたものである。キャラクターや剣などが描かれており、Thが関心を示して質問をすると、剣の材質など細部の説明を言葉は少ないが行う。セッション終了間際になってThが帰る準備を始めると、40〜50枚の描画を持ち出してきて話し始めようとした。それまでCltとのアイコンタクトはなかったが、ここで初めてCltがこちらの目を見て話す。時間を少し延長し、10枚ほどの描画について話を聞いた後で、Cltの意向を聞き来週から一緒に絵を描くことを約束する。

分析

初対面時のThの課題は、信頼関係の確立と予定されていたアートセラピーを段階的に導入するための手がかりを掴むことであった。だが、実際にはCltは膨大な数の罫線紙に描かれた描画を見せた上で、描画そのものよりも物語の説明を熱心に行った。ThはCltの行動を「絵の背後にある物語」を語ること、聞いてもらうことへの強い欲求を持っているのだと解釈した。描画はCltの世界観のほんの一端でありCltの表現は描画だけでは不足であること、Thは絵の背後にある物語を知る必要があることに気付き、ナラティブアプローチの必要性を意識する。

4-3. 描画期(第1回〜3回)

母親からの聞き取りによれば、高校の春学期が始まり、興味の持てない科目については学習を放棄しかかっているものの欠席はせずに通っている。ThはCltと一緒に同じテーマで描画を描く。美術の時間のように机に向かい合って描き、終わるまで互いの絵を見たり、コメントや干渉はしないというルールがCltから提起されて合意する。CltはThとの間に本を用いて壁を作り、自分の絵を覗かれないようにする。描く主題の選択を任せると、Cltはビデオゲームの登場人物を希望した。CltとThはそれぞれインターネットで画像を検索し、その画像をもとにそれぞれに描いた後、お互いの描画について話しあう。2回目のセッションの開始前には母親から報告が

あった。前週にThが帰った後、Cltがセッション中に描いた絵について母親に2時間ほども話し、止まらなかったと言う。

また、描画期、Thは面と向かって尋ねたときには答えない学校関係の質問(友人関係、教師、試験等について)にも一緒に描画しているときならCltが答えることを発見した。また、言語以外ではCltのハンドサイン「そう」「違う」「そこは自分が説明する」などを意味するわずかな手の動きを理解した。これらを知ることは以降のCltとのコミュニケーションを格段に容易にした。

分析

ドローイング期を通じてのThの課題は、Cltとのつながりを得ることだった。ナラティブセラピーの視点に立てば、Cltについて無知であるThがCltを学習する、すなわちCltの世界観や経験について直接的関わりを介して学ぼうとすることである。そのためにThはCltが提案したビデオゲームのキャラクターに自分も興味を持ち、一緒に描くことを通してつながりを得るきっかけにしようと考えた。このことは、Cltとの踏み込んだコミュニケーションの糸口が物語とつながった描画にあることをThが知る上で、必須の過程であった。

4-4. キャラクター設定期(第4回～7回)

この時期には1週間で10枚以上の描画が毎週のように描かれ、Cltが描きためていた描画群と合わせて、画中に描かれたモンスターや動物、その他の登場キャラクターについてのCltからの「語り」がセッションの大部分を占めた。人物同士をつないで展開する大きな物語はまだ表現されていないが、図4の説明時にはすでに次の「語り」期を予感させる物語の表出が見られる。回を重ねるごとにCltの「語り」をThが理解できていることがCltに伝わると、説明はいっそう微細な部分に及び、セッションは規定の60分を超過することが多くなっていった。

描画はこれまでと同じく罫線紙と鉛筆を用い、1枚に6体から多いときには15体ほどの人物が描かれている。キャラクターはそれぞれ直立、あるいはポーズをとるが、動きはない。背後の光焰や氷塊、鎧、剣や棍棒、弓矢などの武器に至るまで、細部に集中して描きこまれている。キャラクター設定期に描かれたキャラクターは、ビデオゲーム、東洋のマーシャル・アーツ(中国の少林寺拳法やカンフー、日本の武士文化)、同世代のティーンエイジャーが好むマーベルなどのアクションヒーロー、「三国志」や「孫悟空」の物語、ディズニー、龍や麒麟、鳳凰といった想像上の動物等の影響から彼がつくりあげたものである。キャラクター設定期の描画は主題から以下のように分類される。

・戦士、炎、剣：不死、無敗、炎よりも強力な焔など、強さの描写：(図1)

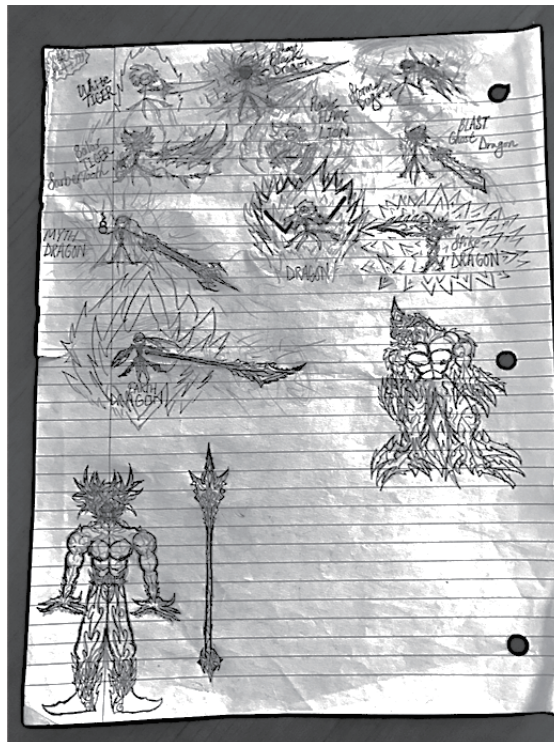


図1 炎の属性を持つモンスターとその武器の設定

・「孫悟空」、半人半獣、幻獣、想像上の動物：人間を超越した力の描写：(図2)



図2 さまざまなキャラクターが描かれたこの時期のドローイング

- ・少林寺の老師や老カンフー・マスター¹⁾:優れた師匠、先輩の描写:(図3)



図3 モンスターから次第に少林寺僧などのキャラクターが登場する

- ・トレーディングカードゲームやビデオゲームの設定画面:(図4)

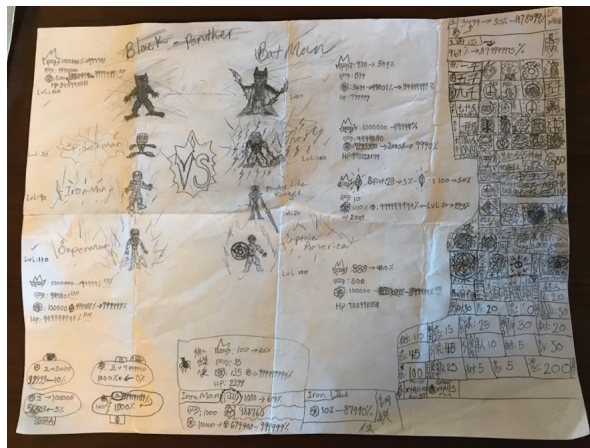


図4 ゲームキャラクター設定画面に倣った仔細なキャラクター設定

分析

キャラクター設定期のThの課題はCltが自分と自分を取り巻く世界をどうとらえているかをより詳細に知っていくことである。セッションではCltは描画を示しつつ、一人一人の人物について、誰がどう「強い」のか、一番強い者(男)とはどんな力を持っているのかということを繰り返し語った。ThはCltの「強さ」をめぐる価値観と意味のネットワークを把握しようと問いかけをし、それに対してCltが「この中で誰が一番強い」というクイズを出題し返してThの理解を促すがしばしばあった。このことはCltとThの間に双方向的な関係が始まったことを意味していると思われる。

Thは中国文化に由来する主題が頻繁に現れることに気付き、Thが中国文化について知ることがCltが自己像に近づくことの助になると考えた。そして語りの合間に孫悟空や少林寺の物語について「教えて欲しい」と説明を求めた。このことはCltが自分の文化的背景を肯定されていると知る機会になっただけでなく、多文化環境に育った自分の文化背景を言語化し他者に表明する体験につながった。CltはThの質問に答えただけでなく、日本の侍、忍者や人名等についての質問をするようになった。描画を通してお互いが持つ異なる文化背景を学び、加えて中国文学、漢字等の共通する文化について話したことは、CltとThの協働的なセラピーを可能とする契機のひとつであったと考えられる。

4-5.「語り」期(第7回～15回)

この時期を特徴付けているのは、描画という形式を超えて立ち現れた、爆発的な物語の表出である。登場人物はキャラクター設定期の微細な描写を離れ、しばしば棒人間で表され、Cltはマンガ的な物語の場面展開に集中していく。図5はこの時期の典型的な物語である。①主人公(長髪の剣士)のもとにギャングの3人組が現れる。②主人公は火炎を放つ剣でギャングを撃退する。③～⑤ギャングのボスが現れ、主人公を力で圧倒し、様々な方法で主人公を痛めつける。⑥主人公は守護獣の助けを得て、ボスに打ち勝つ、というストーリーラインを持つ。



図5 棒人間が登場するストーリーラインの描画

また、この時期の重大な変化点としてCltと同じく長髪である「主人公」の剣士が登場する。物語は主人公の受難と力ある者による救済をめぐる、主人公がいかにいわれのない暴力を受け、傷つけられたか、そして窮地からどのように老師や血兄弟、守護獣に助けられたかが繰り返して語られる。Cltの言語描写は正確で、つねに最適な言葉を探し、時には演技が語りに加わることもあった。傷つきの再演がしばしば語りに挿入された。Cltは主人公が暴力を受ける場面を語る時、場面を再現するかのように立ち上がり、身振り手振りをつけて語り、そのときの身体と心の痛み、絶望を“演じて”いる。Thは共感をもって感情移入するとともに、「Cltは今現在はそこ(絶望せざるを得ない状況)にはいないこと」の道標となる役割を受け持っていたと考えられる。

CltはThが正しく物語を理解しているかを確認するため、クイズタイムを設けて自分の物語についてThをテストすることが度々あった。このテストも含めて、「語り」期はCltとThの信頼関係がより強まった時期であった。そのことを示す出来事として、14回目のセッションのあと、Cltが繰り返して視聴しているという中国のポップ・グループのある曲の動画をThに紹介し、一緒に視聴したあと、その曲の歌詞(「信書」といい信頼に関する歌詞)を中国語で書き起こして贈ったことがある。

分析

Thの課題はCltの「語り」を促してさらに深く彼の世界観を知るとともに、ナラティブセラピーにおける「物語の外在化」を進めることであった。この時期の膨大な語数を費やした語りは、Cltの「問題」を外在化・可視化する作業でもあった。そのことを示す出来事として、Cltが高校の教師の一人に一日中つきまとうことが何日も続いたため教師からクレームが入るという事件があった。「父親像の不在と父親的存在の希求」⁵⁾はCltの語りに頻出するテーマである。教師はアジア人の中年男性で、Thはこの出来事をセラピーを通じて徐々に自覚された父親的存在への希求が現実においても表出したものと解釈した。「語り」期を通じてThはCltの物語のテーマを知るとともにCltが世界をどう見ているかについての手がかりを得ることができたが、その一つが、現実社会での不条理(Cltの場合、理不尽に与えられる暴力)というテーマである。そして、世界を不条理の連続と見るCltの世界観は、正しいものが罰せられる、素晴らしい力を持った者が負けるなど、物語上の矛盾点として現れていた。Cltは話が行き詰まるとその矛盾を解決することなく次の物語を新たに語り始めるのだが、Thは質問によって矛盾点にCltの注意を促すことで、Cltが世界観を見直すきっかけを作れるかもしれないと考えた。「語り」期当初、Cltは60分以上休みなく喋り通すことがあったが、Thが質問を挟みながらCltの語りに加わっていくうち、主人公を取り巻く物語の筋が整理されていった。この過程は、Cltを物語(自らの世界観の)再定義に近づけることができたと考えられる。

4-6. 転回点(第16回)

16回目のセッションは矛盾点に突き当たった物語を再構築的に展開する手がかりを探しあぐねたまま、主人公が戦士になるまでの話に遡った物語が語られて終わった。終了後、母親が広東語ではあるがThの前で「自閉症」と口にしたことがきっかけで母子のあいだに口論が始まった。口論が収まった後、母親が部屋を出て行くと、CltはThに自分が自閉症であることを打ち明け、その辛さを話した。以下はその会話記録である。

(第16回セッション後の会話)

Clt 「自閉症って知っている？」

Th 「知っているよ。どうしてそれを聞いたの？」

Clt 「じゃあ、自閉症はシャム双生児や障がいと同じだって知ってる？」

Th 「うーん、そうなのかな？どこでそう聞いたの？」

Clt 「もしかしたら、シャム双生児は違うのかもしれないけど！でも、精神に問題があるってことでは同じだよ。どこかがおかしいんだ」

「僕は自閉症なんだよ」

Th 「うーん、そうか。そう分かったのはどうして？」

Clt 「医者と言ったんだよ。医者がここに来て僕に言ったんだ」

Th 「そう…そう分かってどう思う？」

Clt 「怖い」

「僕はすごく怖い。なぜかっていうと僕はときどきおかしくなるって知ってるから」

「あるとき、すごく怒っておかしくなった。セメントブロックをある奴にもうちょっとで投げそうになったんだ。その瞬間はすごく暴力的で野蛮で…もう少しでそいつをぶちのめしそうだった」

Clt 「見て、このコップが僕だとする。(テーブルの上のコップの縁を指差して)いちど、僕の自閉症レベルがここまで来たんだ。そのときは怒り狂って、おかしくなった。僕はベランダの柵を越えて飛び出しそうになったんだ」

Th 「OK、それで今はどのくらい？」

Clt 「今はこの辺だよ」(コップの半分より下のあたりを指さす)

Th 「じゃあ、今はおかしくならないのね。まだ、ベランダの柵からダイブしたくなる？」

Clt 「ならない。今は大丈夫」(もう一度、コップの縁を指さして)「僕はもうこのレベルまで戻りたくない。それはすごく怖い。僕はもうおかしくなりたくないんだ」

「でもね、自閉症は治らないって知ってる？」「僕の自閉症も治らないんだって」

Th 「でも、X(Clт名)はもうすでにそのレベルをここまで下げることができたんだね」

Clт 「そうだね」

「自閉症の嫌なところは僕が自閉症だって誰もわからないところなんだ」「学校で、誰かが僕を見ても、僕が自閉症だって分からない。でももし彼が僕と話したら、僕が違うってことが分かっちゃう。僕は普通に見えるけれど、なかみは違うんだ」

Th 「そういうこと良くあるの？」

Clт 「そうだね、良くある」

分析

セッション外の非意図的な機会が、ThにとってはCltの物語の根底にある言葉を知った重要な契機となり、セラピーの転回点となった。ThはCltがASDを具体的かつ的確に語る言葉を持っていることを知って衝撃を受けると同時に、初めて現れたCltの現実についての語りによって、Cltの言葉は「自閉症であることを知っている」「他人とは違う」「制御できない怒りがあることを怖れている」主人公から発せられていることを初めて発見したのである。ThはCltをASDや虐待経験のある者として「セラピストとしての言葉」で見えていた自分に気付き、「主人公」としてのCltの言葉の意味をここでようやく理解することができるようになったと言って良い。Cltにとっては他者に自分が自閉症であるという現実を打ち明けた初めての機会であった。この出来事はCltとTh双方に作用し、以後のセッションが既成の物語や登場人物を借りた語りから「Cltの現実」としての語りに移っていく契機となったと考えられる。

4-7. 描画と「語り」期(第17回～22回)

前回の会話があった後、Cltの語りは一転して男女の三角関係をめぐる話が続くようになる。前半では「語り」期ほどの爆発的な物語の表出はないものの、語りにさらにエネルギーが注がれるようになり、人物は棒人間ほどではないが簡略化されて描かれる。高校が夏休みに入ったため、セッションを何度か延長してみるが、なお語り尽くせず、帰路に着くThに駐車場まで追ってまで話し続けることもしばしばあった。後半は描画が中心となり、物語には初めて女性、それも若い女性が登場する(図7)。典型的な物語は、正義感の強い主人公(図6)が村から閉め出される、森のなかに軟禁されるなどの受難に遭うが、心優しく、誰にでも親切で美しい女性が主人公に昔、助けられたことを恩義に感じ、知恵を働かせて主人公を救い出す。主人公は殺されることもあるが、幽霊になっても女性を守る。回を重ねるごとに、主人公と女性の心の通い合いを邪魔しようとする人物が現れ、主人公を陥れようとするが、二人の絆は揺るがない(図8)。暴力描写はまったく影を潜め、わずかに女性が主人公を救うためにギャングを刺すなどのシーンが描かれる。また、物語のなかでサムライや忍者など、日本の文化への言及が多くなる。Cltが日本文化、Thが中国文化から題材を選んで一緒に描くこともあり、文化交流のような学びあいが続いた。描画では現実の高校生活の人物や出来事の反映がところどころに見られた(図9)。



図6(左)描画と「語り」期の主人公 図7(右)女性の登場人物

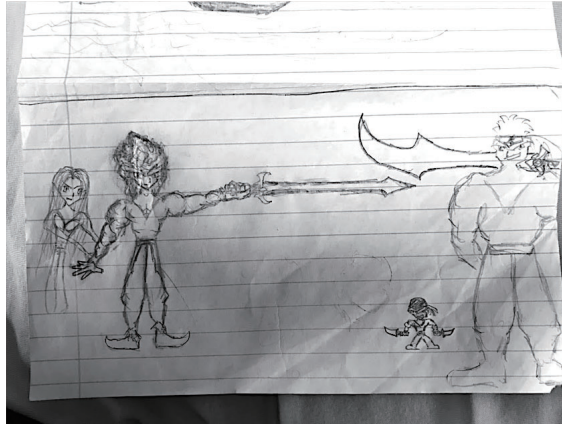


図8

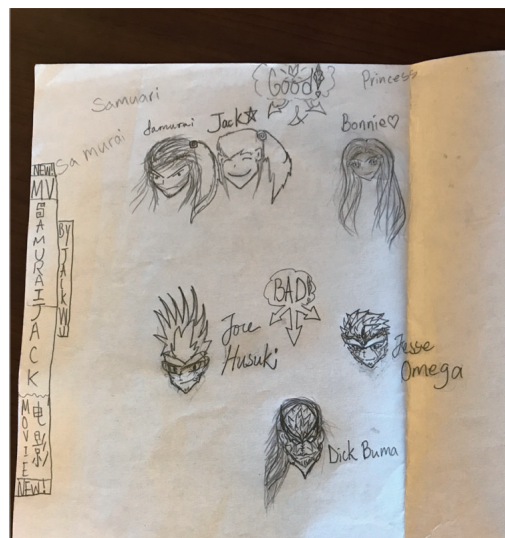


図9 描画に高校生活が反映されるようになる

分析

キャラクター設定期のThの課題はCltが自分と自分を取り巻く世界をどうとらえているかをより詳細に知っていくことである。セッションではCltは描画を示しつつ、一人一人の人物について、誰がどう「強い」のか、一番強い者(男)とはどんな力を持っているのかということを繰り返し語った。ThはCltの「強さ」をめぐる価値観と意味のネットワークを把握しようと問いかけをし、それに対してCltが「この中で誰が一番強い」というクイズを出題し返してThの理解を促すことがしばしばあった。このことはCltとThの間に双方向的な関係が始まったことを意味していると思われる。

Thは中国文化に由来する主題が頻繁に現れることに気付き、Thが中国文化について知ることがCltが自己像に近づくことの一助になると考えた。そして語りの合間に孫悟空や少林寺の物語について「教えて欲しい」と説明を求めた。このことはCltが自分の文化的背景を肯定されていると知る機会になっただけでなく、多文化環境に育った自分の文化背景を言語化し他者に表明する体験につながった。CltはThの質問に答えただけでなく、日本の侍、忍者や人名等についての質問をするようになった。描画を通してお互いが持つ異なる文化背景を学び、加えて中国文学、漢字等の共通する文化について話したことは、CltとThの協働的なセラピーを可能とする契機のひとつであったと考えられる。

4-8. 現実受容期(第23回～28回)

Clitの高校でIEPミーティングがあり、教員5名、Th、行動療法士、母親を前に10年生時の振り返りと11年生の履修計画が議論された。何度かその場から逃げ出しそうにはなったが、アイコンタクトもとり、自分の意見を述べる事ができたClitには、この1年間の達成に関して特別支援担当教員をはじめスタッフから好意的なコメントと励ましを寄せられる。

その翌週のセッションでは描画も語りも持ち出されることがなかった。高校の学校新聞を取り出し、紙面に載っている生徒一人一人が説明される。良い奴か悪い奴か、親切か親切でないか、意地悪かそうでないかという分類があるようだ。

さらに次の週には、いじめに関する直接的な話が「語られ」た。主人公は外見が「他人とは違う」人間で、学校で仲間はずれにされ、からかわれ、打たれ、恥をかかせられる。主人公の家庭は貧しく、シングルマザーに育てられている。誰かが主人公を助けに来ることはなく、ときどき親切な女の子が主人公を助けようとするが、主人公は女の子に迷惑がかかることを怖れる。一度目にはClitはこの話を途中で止めて、面白おかしい描画を描こうと提案する。

その翌週も同じ物語が語られる。いかに主人公の外見が醜いか、他と違うか、そして様々ないじめの細部が語られる。この週もClitは話を途中で止めた。「ハッピーエンディングはない」「でもOK」と言ったあと、描いていたいじめの場面の絵を伏せ、ジェンガのようなゲームで遊ぼうと誘う。

図10は最後に語られたいじめの物語の一場面である。悲劇的な事故で顔がひどく醜くなってしまった主人公が学校でいじめられたあと、離島に隔離されている。すると、親切な女の子が船を漕いでやってきて陸に戻ろうという。主人公は女の子と船に乗るが、陸には帰らず、人々のいないところで暮らしたいという。女の子はそれならときどき訪ねていくと言い、主人公は海のなかで見つけた宝石を掲げて女の子に渡す—この話以降はセッション中ほとんど描画を描かず、簡単な工作をしたり、粘土にいろいろなものを付けてオブジェを作って遊ぶ。



図10 いじめの物語の一場面

ThはIEP ミーティングの後、Cltの状態が安定していることを確認し、セッションを漸減してセラピー終了の準備に入る。

分析

この時期のThの課題は複数あった。1つは協働作業員としてトラウマの物語をCltの「外に出す」こと。もう1つはCltが未来に向けて物語を語り直す目撃者を務めることである。そのためにはトラウマを表現しても安全な環境を準備することが第一であり、Cltとの間に構築してきた信頼関係を保持し、Cltへの関心と共感を安定的に示すことが重要であった。この時期、IEPミーティングのためにThが2回ほど高校に出向きCltの教師たちと会ったこと、IEPミーティングが良い評価に終わったことも、CltとThの信頼関係維持とこの時期の「語り」の後押しにプラスに作用したと考えられる。

逡巡を経た後に三週にわたって語られたいじめの話は、虐待の経験と並んでCltの最も大きなトラウマであったと考えられる。Cltが自分の実際のいじめの経験と変わらない話を語り、身体と精神に受けた痛みをThの前で語り得たことを、Thはセラピーを通して実現したCltのポジティブな変化ととらえた。また、「ハッピーエンドはない」「でも OK」という結末がCltによって語られるのを目撃し、この二言がセラピーを通じてCltとThが到達した未来に向けた再著述の言葉であると理解した。最後に語られた海の中の宝石の話(図10)はこれまで最も寓意的な語りであり、Cltの過去のトラウマに対する心理的な超克がこの寓意的な表現を可能にしたのだと解釈される。

4-9. 終了期(第29回～32回)

セラピーの終了を告げた後の感情の波紋を乗り越え、この時期は描画や写真を参照しての写実的デッサンを共に行った。これまでCltは彩色をすることがなかったが、精密な彩色を施した絵が描かれた。Cltは真剣にアートを習いたいと申し出、Thはそのための手配をケースマネージャーに依頼する。現実社会では、近隣のコミュニティーセンターでアートクラスを開催している女性にアシスタントを依頼される、空手のクラスを体験に行くなど、家庭・学校以外での人との関わりが生じる。

終了に向けて、これまでの達成をひとつひとつ確認した。感情が暴走しなくなったこと、怒りを感じることが減ったこと、高校で同級生と話したことなどを話しあう。Thの注意を引き、セッションを引き伸ばすような行動が2、3あったものの、Cltは安定した精神状態で終了を迎えることができた。最終セッションの際、CltはThに贈る描画を最後まで描いていた。ThもCltに絵を描いて贈った。

分析

セッションでは一緒に絵を描いた他、これまでの描画を見返した。セラピー期間を通じて行われた大量の描画を見返す際には、一枚の描画を見ただけで笑い、気まずさ、賞賛などCltとThから同じ反応をするなど、Thは絵で会話をしているような感覚を抱いた。CltもThが同じ反応をすることを疑っていないようであった。これらのことから、描画とその背景の物語を意味内容の広がりを含めてCltと共有できていることを、Thは確認することができた。

5. 調査結果

5-1. 高校での IEP ミーティングの結果

特別支援担当教師はほぼ全科目にわたって授業態度・成績ともに大幅な改善があったことを評価し、このままなら追加の科目履修なしに卒業資格が得られそうな見込みであることを告げられる。Cltは席上ある部活に誘われたが、理由を述べて断ることができた。一方で「先生をがっかりさせたくない」という気持ちも表明することができた。1年前のIEPミーティングでは開始早々、席を立てて出て行ってしまったことを考えれば、コミュニケーションスキルも格段に向上したと見られる。

5-2. PHQ-9 スコア

PHQ-9スコアは全セッションを通じて6ポイント減少し、開始時の「重度に近い中等度のうつ症状」から「中等度」の判定になった。

質問票 1 PATIENT HEALTH QUESTIONNAIRE (PHQ-9)

NAME: _____ DATE: _____

Over the last 2 weeks, how often have you been bothered by any of the following problems?
(Indicate your answer)

	Not at all	Several days	More than half the days	Nearly every day
1. Little interest or pleasure in doing things	0	1	2	3
2. Feeling down, depressed, or hopeless	0	1	2	3
3. Trouble falling or staying asleep, or sleeping too much	0	1	2	3
4. Feeling tired or having little energy	0	1	2	3
5. Poor appetite or overeating	0	1	2	3
6. Feeling bad about yourself—or that you are a failure or have let yourself or your family down	0	1	2	3
7. Trouble concentrating on things, such as reading the newspaper or watching television	0	1	2	3
8. Moving or speaking so slowly that other people could have noticed. Or the opposite—being so fidgety or restless that you have been moving around a lot more than usual	0	1	2	3
9. Thoughts that you would be better off dead, or of hurting yourself	0	1	2	3

add columns

(Healthcare professional: For interpretation of TOTAL, TOTAL:
please refer to accompanying scoring card).

If you checked off any problems, how difficult have these problems made it for you to do your work, take care of things at home, or get along with other people? _____

Copyright © 1999 Pfizer Inc. All rights reserved. Reproduced with permission.
663B 10-04-2005

表 1

5-3. 感情記録

セッション10回までに頻繁に回答にあがっていた「怒っている」(5回)「退屈」(4回)「ピリピリしている」(4回)「傷ついた」(2回)は、最後の5回にはそれぞれ0回にまで減少。最後の10回のセッションでの回答は、「穏やか」(4回)「ワクワクする」(1回)「ハッピー」(4回)という結果となり、ほぼポジティブな感情に置き換わっていると評価される。

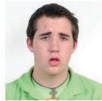
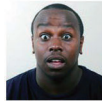
質問票2

Emotional Check-In

(Level 1)

Name: _____ Date: _____

Today, I am feeling:

					
Calm	Happy	Excited	Confused	Nervous	Afraid
					
Disappointed	Hurt	Sad	Bored	Upset	Angry

Emotional Check-Out

Name: _____ Date: _____

Now, I am feeling:

					
Calm	Happy	Excited	Confused	Nervous	Afraid
					
Disappointed	Hurt	Sad	Bored	Upset	Angry

Copyright © 2010 www.Do2Learn.com



表2

6. 考察

クライアントの16歳男子は、ドメスティック・バイオレンス、幼児・学童期の虐待経験からトラウマに由来する症状を示していたことから、セラピー開始以前にはアートセラピーが最も適切であると思われた。しかし、全セッションの経過を考察した上で、アートセラピー単体でクライアントのポジティブな変化を引き出すことは難しかったであろうと考えられる。クライアントに最も重大な変化が現れたのは、「語り」期であったが、それは描画を援用し、言語と視覚言語が互いに補いあいながら、内面の世界観が表出した結果であった。思春期にいるクライアントがASDであることを受け入れるのは難しいと思われたが、クライアント本人がセラピストにASDであることを語ることが結果的にASDであることの受け入れにつながった。この転回点に達し得たのは、膨大なエネルギーのように噴き出してきた、描画と語りを行き来しつつの、内面の世界の表出があったからであったと思われる。クライアントの場合は抑えがたい語ることへの欲求があり、語ることで彼の半生の辛い出来事や思いが処理されていく結果となった。また、現実のセッションにおいては、アートとナラティブを複合させるまでもなく、表現を中継地に自然にセッションが描画と語りを往来し、物語に統合されていったことを指摘しておきたい。

また、思春期のクライアントとのセッションでは、セラピストもゲームなどサブカルチャーを大量に含む、ティーンエイジャーの「個人語」を無心に学び、かつ積極的な関わり合いを示し、協働することが不可欠であった。

この研究では、クライアントとセラピストは異なる文化背景を持っていたが、双方が複数の文化を学びつつセッションをすすめることがお互いの表現を通したつながりをさらに深め、IEPミーティングで評価されたように、クライアントのソーシャルスキル獲得にも貢献する結果となった。

7. 終わりに

多文化社会でのケアを考えたとき、心理療法においても言語によらないケアが課題になっていくと考えられる。同時に当事者及び「個人語」をケアに役立てていくこともまた必要となるであろう。この観点からアートとナラティブを流動的に用いるセラピーを今後も追求していきたい。セラピー場面で現れる、文化背景や民族性に留まらない多文化性にもさらに考察を加えていく必要があると考える。本研究で得られた知見は思春期のASDを持つ子どもたちのケアの実践に役立てていくほか、多文化グループ／コミュニティにおけるアートとナラティブを基盤とするケアについてさらに研究を進める一助とする計画である。

注

- 1) IEP: 米国の公立学校システム(キンダーガーデンから12年生まで)において特別支援の必要な児童学生のために提供されるプログラム。教師、特別支援担当教師、保護者、療法士、スクールカウンセラー等で構成されるIEP ミーティングで、達成目標、必要な支援、履修する授業、コースなどを決定し、年に一度見直しを行う。
- 2) ロサンゼルス郡精神保健部(DMH)で使用されているプログレス・ノートの様式を使用した。
- 3) クライアントが通うロサンゼルス各学校区では6～8年生が中学校、9～12年生が高校に区分される。
- 4) 地域センター(Regional Center)は知的障がい者、発達障がい者と家族のための支援を行う。
- 5) キャラクター設定期においても、血の繋がった祖父、父親は登場していない。現実には得ることのできなかつた自分を守り育ててくれる父親的存在への希求は、物語のなかで、血兄弟、老師、力のある庇護者に振り替えられている。

参考文献

Anderson Harlene, 1997, 『Conversation, Language, and Possibilities: A postmodern approach to therapy』Basic Books: New York (=野村直樹他, 2001, 『会話・言語・そして可能性』, 金剛出版)

Anderson Harlen, Goolishian H, 1992, 「The Client is the Expert: An not-knowing Approach to therapy」『Therapy as Social Reconstruction』Sage Publication: Thousand Oaks.

遠藤芳子、塩飽仁、福井里佳, 2001, 「入院中の子どもへの遊びによる看護介入の効果に関する研究」『日本看護研究学会雑誌』第24巻第4号 pp.57-68, 日本看護研究学会.

Calisch A, 2003, 「Multicultural training in art therapy: Past, present and future」『Art Therapy: Journal of the American Art Therapy Association』20(1), Taylor & Francis: New York.

Denborough, David, 2014, 『Retelling the stories of our lives: Everyday narrative therapy to draw inspiration and transform experience』W.W. Norton & Company: New York. (=小森 康 永, 奥 野 光, 2016, 『ふだん使いのナラティブ・セラピー: 人生のストーリーを語り直し、希望を呼び戻す』, 北大路書房.)

Eaton, Leslie G., Kimberly L. Doherty, Rebekah M. Widrick, 2007, 「A review of research and methods used to establish art therapy as an effective treatment method for traumatized children」『The Arts in Psychotherapy』34, Elsevier: Amsterdam.

Elkis-Abuhoff, Deborah L. 2008, 「Art therapy applied to an adolescent with Asperger's syndrome」『The arts in psychotherapy』35(4), Elsevier: Amsterdam.

Emery Melinda J., 2004, 「Art therapy as an intervention for autism」『Art Therapy: Journal of the American Art Therapy Association』21(3), Taylor & Francis: New York.

Epp Katherine Marie,2008,「Outcome-based evaluation of a social skills program using art therapy and group therapy for children on the autism spectrum」『Children & Schools』30(1),Oxford University Press:Oxford..

Erikson Erik H.,1968,『Identity: Youth and crisis』W.W.Norton & company:New York.

Foa Edna.B.,Keane,Terence.M.,Friedman,Matthew.J.,Cohen,Judith. A. (Eds.),2008,『Effective treatments for PTSD:practice guidelines from the International Society for Traumatic Stress Studies 』Guilford Press:New York.

Hannemann,Beat Ted.,2006,「Creativity with dementia patients」『Gerontology』52(1),Karger Publishers:Basel.

早川正祐,2009,「ナラティブ・セラピーとケア：当事者の物語の重視とは何か」
『東京大学大学院人文社会系研究科・文学部哲学研究室応用倫理・哲学論集』4,東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室

Jensen Lene,2010,「Coming of Age in a Multicultural World:Globalization and Adolescent Cultural Identity Formation」『Applied Developmental Science』7(3),Taylor & Francis:New York.

Kagan Richard,2014,『Rebuilding attachments with traumatized children:Healing fro losses, violence,abuse,and neglect.』Routledge:New York.

Kilpatrick Kym L.,Williams Leanne.M.,1997,「Post-traumatic stress disorder in child witnesses to domestic violence」『American journal of Orthopsychiatry』67(4), American Psychological Association:Washington,D.C.

Kramer Edith. Wilson Laurie,1971,『Art as therapy with children』Schocken Books:New York.

Levendosky Alythia A.,Huth-Bocks Alissa C.,Semel Michael A.,Shapiro Deborah.L.,2002,「Trauma symptoms in preschool-age children exposed to domestic violence」『Journal of interpersonal Violence』17(2),Sage Publications:Thousand Oaks.

Linesch Debra,Ojeda Angélica,Fuster Maria,Moreno Stephanie,Solis Guadalupe,2014,「Art Therapy and Experiences of Acculturation and Immigration」『Art Therapy』31,Taylor&Francis:New York.

McNamee Sheila.,&Gergen Keneth.J.(ed.)、1992, Therapy as Social Construction
(=野口裕二, 野村直樹, 2014,『ナラティブ・セラピー：社会構成主義の実践.』遠見書房)

Rusted Jennifer,Sheppard Linda,Waller Diane,2006,「A multi-centre randomized control group trial on the use of art therapy for older people with dementia」『Group Analysis』39(4),Sage Publications:Thousand Oaks.

Schouten Karin A.,de Niet Gerrit J.,Knipscheer Jeroen W.,Kleber Rolf J.,Hutschemaekers Giel J.,2015,「The effectiveness of art therapy in the treatment of traumatized adults:a systematic review on art therapy and trauma」『Trauma, violence, & abuse』36(4),Sage Publications:Thousand Oaks.

Semmler, P.L., & Williams, C.B. (2000). Narrative therapy: A storied context for multicultural counseling. *Journal of Multicultural Counseling and Development*, 28(1), 51-62.

Slayton Sarah C., Jeanne D'Archer, Frances Kaplan, 2010, 「Outcome studies on the efficacy of art therapy: A review of findings」『Art therapy: Journal of the American Art Therapy Association』16(2), Taylor&Francis: New York.

Wethington Holly R., Hahn Robert A., Fuqua-Whitley Dawna S., Sipe Theresa Ann, Crosby Alex E., Johnson Robert L., Liberman Akiva M., Moscicki Eve, Price LeShawndra N., Tuma Farris K., Kalra Geetika, Chattopadhyay Sajal K., 2008, 「The effectiveness of interventions to reduce psychological harm from traumatic events among children and adolescents: a systematic review」『American journal of preventive medicine』35(3), Elsevier: Amsterdam.

White Michael, 1994, 『Re-authoring lives: interviews and essays』Dulwich Center Publications: Adelaide. (=小森康永, 土岐篤史, 2000, 『人生の再著述: マイケル、ナラティブ・セラピーを語る』, ヘルスワーク協会)